

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆

小林国二・小林善秋・高橋潔
室賀清輝・高橋利春・加瀬由起子
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信

後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

長岡の大花火に先住様を思う

翠巖龍弘

「毎日朝から暑いですね」の挨拶ではじまるように、今年の夏は日本列島全体が猛暑。各地で毎日のように猛暑日がつづき、熱帯夜の記録が更新されたり、熱中症で亡くなられた人も百六十人をこえる酷暑、極暑の日々でした。

私などは気力が落ち何事にも集中力が低下してしまいが、冬の方がましかなと時々思ったりもしました。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われておりますが、この季刊紙が皆様方に届くころは涼しくなっていることを願っております。

長岡祭は昭和二十年八月一日の空襲で多数の犠牲者(焼死者)がおられ、また市の中心部の多くが焼失しましたが、その復興祭として、八月一日～三日に慰霊祭も兼ねて行われてまいりました。現在は長岡祭りとして

二日、三日の夜に大花火大会が催され、多くの観衆で信濃川の兩岸は一杯になり、全国三大花火大会の中に選ばれております。日本人は桜と花火が大好きな民族といわれております。桜の散り方、花火の大音響とともにパーッと開き、サァーと消える。その潔さが日本人の美意識や心情に合っているようです。また、何も彼も忘れて魅入る美しさや、普段の日暮らしには簡単に割り切れない事柄が多い社会の中の生活で、潔さへの憧れもあります。故、先住見龍方丈様も花火が大好きで「ドーン」の



玉蘭先生の書かれた書

ご家族の皆さままでご覧ください

音を聞くとじっとしていれなくて、母を連れだつて土手へ見に行かれたことが思い出されます。私も色々な場所で見た経験があります。舟上、土手、棧敷、寺の近く、庫裏の屋上、遠く離れた八方台(長岡の東の山の上)等々。同じ花火でもそれぞれ場所によつて感じ方が変わります。そんな時、先住様のことを思い出します。

先住様は昭和六十二年に遷化され、昨年廿三回忌の法要を終えました。明治生まれの人らしく、自分に、また家族も自分に準じるということで大変厳しく、他の人には優しく親切な師匠でした。一緒に生活している時は、私には到底及ばない凄腕の師匠であり、父親と思いつつも、反発する思いも多々ありました。

「山に入りて山は見えず」と時々言われておりました。が、堂々たる山も山中に入ると木々や岩や草などばかりが目につき山は見えませんが、少し離れて見ると山全体が見え尚かつ迫力も感じます。遠く離れて見ると、東京から見える富士山のように見えます。

花火も同じで、真下で見ると迫力がありますが全体が見えにくい。私の場合は一緒に生活した時か一周忌の時がそんな感じでした。三回忌、七回忌となるにつれて、岸部で見ると、土手で見る花火。十二回忌の頃、棧敷で見ると、全体像、禅宗僧侶としての凄さが観じられて、頭の下がる思いを感じたことを思い出します。

十七回忌、廿三回忌、廿七回忌など、年月がたつにつれ、花火を徐々に離れて見るように、山が次第に小さく見えるようになり、何れ、先住方丈様に会ったことのない私の孫弟子は、長岡市の隣の片貝町の花火のよう

【日々精進(十)】

命の大切さ、命の重さの分かる子へ…

近藤 真弘

「父と母で二人 父と母の両親で四人 そのまた両親で八人 こうしてかぞえてゆくと十代前で千二十四人二十代前では…? なん

と百万人を超すんです 過去無量のいのちのバトンを受けついで いまここに自分の番を生きている それがあたなのいのちです それがわたしのいのちです」
これは相田みつをさんの詩「自分の番いのちのバトン」です。

今年は今までの人生で一番「暑い」という言葉を使った夏ではなかったかと思うくらい暑い日が続きました。こうして原稿を書いている九月初めでもまだ残暑というより真夏の様な暑さです。そんな猛暑の真つただ中、お盆も終わった先月八月の二十五日に無事、第一子が誕生いたしました。無事に生まれてきてほし

いと願いが届き、予定日より一日遅れの出産ではありましたが、三三三五グラムの元気な男の子が生まれてきてくれました。

当日、病院の廊下で出産を待っている際にはとにかく母子ともに無事出産を終えてほしいという事だけを考えておりました。テレビなどのイメージでは赤ちゃんの泣き声と共に医者さ

んが出てきて「無事に産まりました」なんて光景を想像していましたが、実際には看護師さんが外に出てきて無事生まれましたの報告、赤ちゃんの泣き声はしません。その一言の後、小一時間待ち、ようやく看護師さんの「どうぞお入りください」の言葉。

無事にちゃんと生まれたのかな? 何かあったりして待たされていたのかな?



そんな心配の中部屋に入るとまず目に入ったのは大役を終えた妻久美子の安心した笑顔。それを見てひとまず良かったと一安心。そして傍らに目を移すとそこには生まれたばかりの赤ちゃん。今まで味わったことのない何とも言えない感情が湧きあがってきました。しかしそんな感情に浸る暇もなく矢継ぎ早に病室の移動、妻に抱かれた赤ちゃんと共に病室に移ると妻がベットに移る間看護師さんに赤ちゃんを手渡され「お父さんちよつと抱いていてください」と赤ちゃんを渡される。お父さんという響きに新鮮さを感じ、初めて抱く赤ちゃんの重さ、まずは思ったよりずっと軽い事にびっくり、おぼつかない抱き方で我が子を胸に抱き、もぞもぞと動くその赤ちゃんに新しい命を感じ鳥肌が立ってきた。



ほんのちよつと前まで妻のお腹の中にいた赤ちゃん。髪の毛が生えている事、爪が伸びている事、小さな小さな手が動いている事、声を出して泣いている事、すべてに感動と共に、新しい命のすずかさを感じました。

今は一週間の入院を終え、お寺に戻ってまいりました。名前には任職に命名のお願いをし、「真人(まひと)」という名前をつけてもらいました。私の名前から「真」の一字をとったのと同時に、真人という言葉は仏教的にも真理を極めて仏道を体得した人、という意味があります。これからはおじいちゃん、おばあちゃんになった私の両親、我々夫婦、そして真人

を加えた三世帯での暮らしが始まります。明るく、笑顔の絶えない家庭を、そして真人には命の大切さ、命の重さの分かる立派な子になってほしいと願っております。

文頭の相田みつをさんの詩のように自分の命がいまここにあるという事は数え切れないくらい多くの巡りあわせから来ています。普段はそんなことを考える事もなかなかありません。しかし新たな命の誕生で改めてこの有難き自分の命がいまここにある事の有難さに気付く事が出来ました。最後にこの喜びを文章としてこの季刊誌でお伝えできた事、その機会を頂いた事に感謝致します。

還暦花火打上げ大成功!



上田町在住の木津幸雄氏撮影

昨年春に高校の同窓会があり、その席で同期の誰となく来年還暦だなどの声。昭和二十五年四月〜二十六年三月までの仲間ですから全員がそれに当たる訳ではなかったのですが、その声は長岡祭の花火打ち上げで祝おうと盛り上がった。二次会の同期会でさまざま具体案が検討されたから何を

も早い連中です。五百余名の同期に寄付をお願いして上げる花火です。からどの位の花火になるかも判らない状態での出発です。

春に言い出したことを具体化するには十一月になりました。言い出しつぺの者からそれに同調した者、そして関心を示した者にメールを送り幹事を募りました。幹事

は不定期出席で良いので十五名位で構成し、会長・幹事長・事務局を選びました。もとも同期の会で「孜孜の会」がありますから編成は楽でした。孜孜の会の下部組織として本会の後援をお願いしてスタートしました。一番の問題点は目標金額をどうするかです。仲間には高所得者が何人かおられますから、いざと

なれば彼らに出させるつもりで臨む大まかな計画です。一番貢献してくれたのが、同期の役人でした。しかも花火担当の責任者であった訳で好都合なこと。還暦花火打上げ実行委員会が発足し毎月一回の定例会議とともに形にしていけます。会長は長岡で開業している小児科の先生で予算を確保するに充分。幹事長は専任で事務はばっちり。会計は同期の女性税理士とくればもう問題はなし。事務局は筆者で一番頼りのない者が担当する羽目になった。幹事の仲間は医者・歯医者・経営者・学校の校長・大企業の重役と寄付に持つて来いの連中でお祭好きですからもう出来上がったようなものでした。

会合は会議をやつてから宴会と仲の良い仲間が益々結束するパターンで進行しました。花火師がプレゼンに長岡まで来て下さり三百万円用意下さいとの事。内容は五百万円の花火にしますとの言いようで少し不安はありましたが、お願いすることにしました。必ず三百万円集

めねばなりません。寄付にあり封書によるお願い文を住所の判る四百二十名に出し待つこと二ヶ月間、一人三万円を基本に徐々に集まり始めました。三百万円は簡単に集まったのですが、経費も考え目標は出来れば五百万円駄目でも四百万円は集めたいと意気込みました。

孜孜の会には東京支部があり東京でも活動していません。東京の有志に強く声がけし勢い良く寄付は四百八十万円まで集まりました。何をやるにもお金がかかりますから寄付の行方は大きな課題です。最終的には五百万円を超える寄付が集まったので事務局としては安堵しました。会合の宴会は皆自腹であり花火代三百万円と通信費を除けば百五十万円ほど残ります。そこで考えたのが「下キメント還暦花火」というDVD作成です。プロの映画監督に依頼して記録を残すことにしました。同時に寄付者の記念品にクリスタル文鎮を用意しました。だいたいこれで予算は消化します。残りは古希まで取っ

ておきましょうと言う意見もあります。

花火はもともと天地人花火を上げる花火師が担当してくれましたので天地人花火の三版の様相があります。それでも多分全国初の打ち上げ方式を採用して臨みました。それは、音楽に合わせて上げる花火です。BGM的に流すのではなく、威風堂々の行進曲に合わせた花火になりました。ナレーションも同期の一人が自費で東京から駆けつけ本格設備の元で吹き込み異彩を放ってくれました。ナレーションが始まり前の花火の煙が風で流され舞台は出来上がったのでした。三分弱の花火が終わるや万歳の声や歓喜の声が上がりました。皆で握手して還暦花火の成功を祝いました。同期の力は侮れないです。一丸となつて行う事業では今でも生きています。カンボジアの学校二校米百俵スクールもまだまだ支援してやっています。同期の皆さん感謝してます。

長岡高校四十四年卒同期の還暦花火打上げ実行委員会事務局
小林国二 拝

徹関先生に学ぶ — 中村先生を偲んで — (五)

西澤 正元

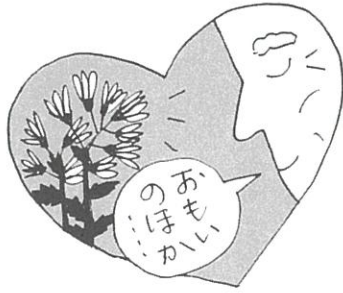
(前号からの続き)

三年後の昭和五十二年十月、筑波の国立教育会館分館へ行かれた佐藤係長から、十月三十一日に仏教学者の中村元、評論家の江藤淳、将棋名人の大山康晴の三名士の講演があるから、新しい研修センターの見学を兼ねて聞きに来ないかという誘いを受けた。その頃、私は中越教育事務所の管理主事をしていましたが、何とか都合がつくようなので喜んで出かけることにした。

前日に上野駅で佐藤係長と落ち合い、筑波へ向かった。新しく拓けた学園都市は、日本にもまだこんな土地が残っていたのかと思うくらい広大であった。

その日泊めたもらった研修センターの夕食が思いがけない席になった。それは、同宿された中村元先生の文化勲章受賞のニュースが報じられたからである。夕食のテーブルが、ささやかではあ

ったが祝賀の宴にかわった。同席した私たちは先生に心からお祝いのごちよを贈った。私はたまたまその日、家内が作ってくれた山形出身の佐藤係長が大好きな菊(おもいのほか)のおひたしを持って行った。私がお祝いに薦めた菊のおひたしを口にされた先生は、始めて食べたとおっしゃったのが印象に残っている。



私はその席で、仏教学の泰斗であられる先生が、少しも偉ぶるところがなく、初対面の私ごとき者にも丁寧に対応されるのにびっくりした。先生は、かつて小千谷市の教

育長をされた五智院の住職、高野一能先生のことともよくご存知であった。話題が広がり、年越しの参詣客でアガリの多いのが成田山の新勝寺や、鶴見の総持寺という話に及んで座がいつそうなごやかになった。その席で私はすっかり中村先生の温かい人柄に魅せられてしまった。筑波は私にとって先生との運命的な出会いの場になったのである。

その後、私はご無礼を承知しながら、先生の寛容な人柄に甘えて、年賀状や転勤の挨拶、時には先生がテレビに出演されるとその感想や、著書出版のお祝いなどの手紙を差し上げてきた。先生は極めて多忙な中にもかかわらず、そのつど自筆の返事を下さったのである。先生の文化勲章受賞の挨拶状から紹介します。

拝啓 秋も深まりましたが、尊
台にはますますご健勝のこととお
よろこび申し上げます。さて、私こ

とこのたび受賞に際しましては早速お心のこもったお祝いのおこ

とばを頂きましてご懇情に感激致しております。浅学不敏な私がこのような栄誉にあずかりますのは全く恐縮至極にて心苦しく存じますが、これもひとえに多年にわたる温かき皆様のご支援のお蔭と存ぜられ、ただただ有難く存じております。

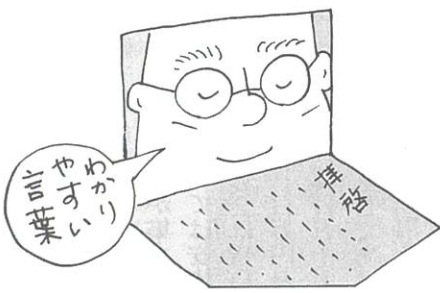
お蔭さまでただ今は健康に恵まれておりますので、この上は微力を尽くしてさらに新たな研究を進め、ご高恩におこたえしたいと念願しておりますから、今後ともなにとぞ一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

まずは略儀ながら、とりあえず書面を以てお礼申し上げます。次第に朝夕は冷気が加わりますから、くれぐれも御身ご慈愛のほど祈り上げます。 敬具
昭和五十二年十一月 中村 元
西沢 正元 覽台

先日はゆくりなくも筑波で拝眉の機を得まして永く忘れ得ざる追憶でございます。

今回、先生の礼状をワープロ口打ちしていて気がついたのだが、先生の礼状は難しい用語を使った格式張った文面ではなく、率直に叙勲の喜びを表された平易な文章であ

った。つねづね、とかく高遠、難解で分かりにくいと言われている学問を平易で分かりやすいことばで書くと言われていた先生の片鱗をうかがわせるものであった。



私が小千谷小学校にお世話

話になっていた時、中村先生の手紙のことを横 東榮教育長に話したところ、横教育長は、「校長先生、それは大変なことです。私たち僧職にある者にとって中村先生は雲上の人のような方です。先生の手紙を頂くなど考えられないことです。その手紙は、先生の全集に収めてもいい価値のあるものですから、ぜひ大切にされるように」と言われて、今さらながら自分の

不明を恥じたことがある。次は、私の転職や退職の挨拶状への先生の返信である。

拝啓 陽春の良い気候となりましたが、ご清祥の趣、およろこび申し上げます。このたびは見附小学校に御転職の由、衷心よりお祝い申し上げます。久しく拝眉の機を得ませんが、くれぐれもお大事にご健勝を祈りあげます。 敬具
四月二十九日(昭和五十四年)

拝啓 このたび小千谷小学校長にご就任の由、おめでとうございませす。くれぐれもご健康に御留意の上、御健闘を祈り上げます。先日のテレビをご覧下さいました。年をとりましたが、何とかやっております。 匆々
四月二十日(昭和六十一年)

このたびは御丁寧な御挨拶を送り頂きまして、ありがとうございます。御感慨深いことと存じますが、今後一層の御発展と御健勝を祈り上げます。所用あり、小生いま新潟に来ておりますが、明日帰京します。四月八日(平成元年退職時)

貴簡拝承 このたび、見附市教育長の重職に御就任の由、衷心より御祝い申し上げます。一段の御活動と御指導を願ひ上げますとともに御健勝を祈り上げます。 匆々
十月二十七日(平成二年)

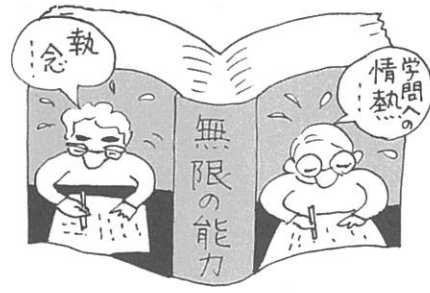
先生から頂いた書簡の中
で、唯一、便せんに書かれた
手紙である。それは昭和六
十三年二月に先生が、「図説
仏教大辞典」を出版されたと
き記事を載せた新潟日報の
「きょうの人」欄のコピーと、
私も何とかその辞典を購入
した事、そりに加えて前
年の昭和六十二年十月一日
が小千谷小学校の開校百二
十周年であったことなどを
書き送った手紙の返事であ
る。この手紙は、私のとりわ
け大事な宝物になっている。

まず、昭和六十三年三月三
日付「新潟日報」きょうの人」
欄の抜粋を記す。

《きょうの人》

難解な仏教用語を何とか分かり
やすく、とカラー写真やイラスト
の入った七百ページ、二千項目の
分厚い「図説仏教大辞典」(東京
書籍)を出版した。「目で見る仏教
語辞典」といえるものは今までな
かったですから、一般読者にも学者
にも喜んでもらえるでしょう。イ
ンド哲学の世界的な権威にまた
一つ、大きな業績が加わった。刊
行のきっかけは昭和五十年に出
した「仏教語大辞典」。名著のほま
れ高い全三巻、四万五千項目の大
著も、「本人は」文学だけの辞典で
写真や図をくわえられなかった
と不満で、出版後すぐ取り掛かっ

たのが今の図説版。先の大辞典を
基に半分は新しい項目を立て、氏
自身がインド行で撮った写真も入
れた。(以下略)



この辞典の基になった「仏
教語大辞典」は、先生が昭和
十八年に着手され、戦争中は
中断したが、戦後すぐの荒
廢の中から再び着手して、
昭和二十二年に「仏教語邦訳
辞典」として謄写版刷りで
完成。すぐ更なる充実をめざ
して翌二十三年から二十年
をかけて、約三万語の原稿を
作成し、出版社から刊行する
予定であった。ところが、こ
こで思いもよらぬ出来事が
起きた。その年(昭和四十二
年)に原稿が紛失してしまっ
たのである。盗難かと騒が
れたが、ついに発見されなか

第十五回 KAKA笑の会

ご要望にお応えして『精進料理』の会



KAKA笑の会も早いも
ので、十五回目を迎えること
になりました。会を重ねて来
た中で「精進料理」をどの要
望が多いため、小金山泰玄老
師にお越しいただき四回目
の『精進料理の会』を開催す
ることになりました。

二年前も秋の開催でした
が「長芋ソーメン」「蓮根糝
薯」「茗荷寿司」など、秋の素
材を使った珍しいお料理を
作られ、品数の多さに器が
足りなくなり、簡易食器の

上に庭から摘んで来たハラ
ンを載せて対応するなど、
今回はどんなお料理を作っ
てくださるか楽しみます。
皆様のお越しをお待ちし
ております。



日時 十一月六日(土)
午後六時三〇分
会場 安善寺本堂
会費 三千円
定員 百名
※百名になり次第閉め切
らせていただきます。

った。先生はこの苦難にも
めげず、「もう一度やり直し
ます」と言って、一ヶ月後に
執筆を再開され、八年後の
昭和五十年二月に刊行の運
びとなった。これが先生の
畢生の事業ともいえるべき「
教語大辞典」である。

私はこの話を聞いて、新潟
師範の大先輩の諸橋轍次先
生の「大漢和辞典」完成の苦
労を思い出した。ご案内のよ
うに、諸橋先生も大漢和辞典
の出版まで三十五年の歲月、
心血を注がれた。しかも戦災
で組み上げた原版を一切焼
失するという災難に遭い、諸
橋先生自身も失明の危機を
乗り越えて完成された。まさ
に両先生に共通する学問へ
の情熱と執念を思わざるを
得ない。そして人間の持つ無
限の能力に驚嘆する。

以下、次号へ続く



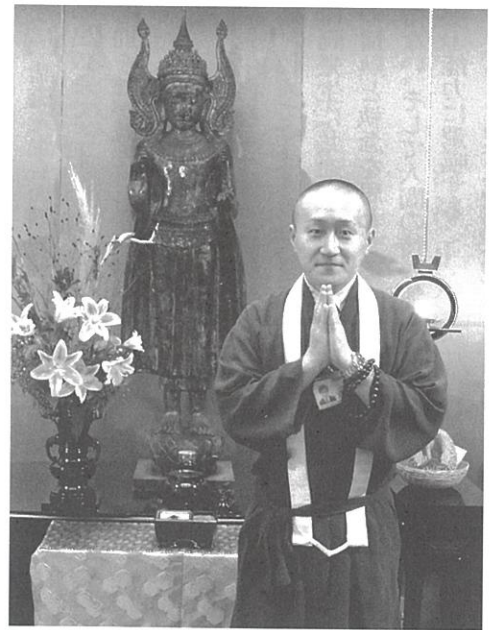
『インド仏跡巡拝の旅』に参加させていただいて “生きている”ことの大切さ 森田敬史

私は、長岡西病院ビハラ病棟で常勤ビハラ僧(常駐している僧侶)として勤務しております。そこで、病棟が開設される以前からボランティアとして活動をされており、安善寺の方丈様とご縁をいただき、現在も様々なことを教えていただいております。ちょうど『インド仏跡巡拝の旅』のお知らせを、いつも方丈様が病棟へご持参していただき、まず本紙の記事で目にし、すぐさま確認すると安善寺の檀信徒でなくてもかまわないということをごさいますし、これも何かのご縁だと思ひ、ご一緒させていただきました。

以前より、僧侶である以上、一度はお釈迦様と切っても切れないインドには足を踏み入れてみたいと考えておりましたので、このいただいたご縁を大切にしなければならぬと思つた次第であります。

今回の旅行で、やはり“生きている”や“生かされている”という生に対する一生懸命さを肌で強く感じる事ができました。とにかくインドで生活されている方々の溢れんばかりの生命力、あるいはエネルギーといますか、生に対する良い意味での執着に圧倒させられました。

私が普段勤めております病棟は、がんを患い、残りの時間を精一杯自分らしく過ごそうとされる患者さんが多いため、私自身は生と死が交錯する場所であると表現しております。つまり生きていく、その裏側に絶えず死というものを意識しなければならぬ場所でもあるわけですね。そのため、この病棟に勤



めさせていた。以来、ほんのひとときの時間、あるいは機会を大切に、後悔のないように過ごしていた。だくようにお手伝いをする重要性を感じてきました。この旅行を経て、自分自身の生も含めて“人が生きる”ということを改めて深く考える機会をいただきました。

また、お釈迦様の足跡を「約二千五百年前に、この場所を、釈尊は…」という思いを噛み締めながら辿っていく中で、最も感銘を受けたのは、ブッダガヤのお釈迦様が悟りを開かれました。金剛宝座であります。そこに大きく茂っていた菩提樹が当時より何代目かになつていて、というお話をお聞きし、長い歴史を感じました。が、その長い時間があたたかみ止まっているのではないかと錯覚するほど、漂う雰囲気は何とも言えない心に染みる雰囲気でありました。

自分がこの地で手を合わせる事ができているのは、様々な繋がり、そしてご縁によって実現していることなんだと、他の国からも参加されたであろう僧侶の方々が読経されたり、五体投地をされたりする姿の中で大変感激しておりました。

ともすれば、最近はいろいろな機械を使用することにより、あたかも自分がその場所を歩いているかと錯覚してしまうような状況を作り出してしまふことが出来る時代になつてきております。しかし、その場の雰囲気や自分の肌で感じ、それを自分の内で熟成させる作業は、やはり実際にその場に行つてみないと出来ない旅の醍醐味ではないかと思つております。

今回の旅行に参加させていただいて、それを特に強く思つたことはいままでもございませぬ。ありがとうございました。合掌

お別れ

(平成二十二年七月〜八月末)

小澤快祥様 七月廿八日寂

長岡市横山

桑原則子様 七月三十一日寂

長岡市高畑町



ご冥福をお祈りいたします。

旬歌 愁灯

[二十七話]

アルプス一万尺

加瀬由紀子

この夏も暑さは衰えることなく、熱中症で亡くなる人が相次いだ。友人は、猛暑による夏バテで目標の3キロダイエットに成功したと、複雑な心中(?)を語った。

私はといえば、うだる暑さの街を離れ、夜の幾日かを燃え盛るストーブに手をかざし、山旅の話に耳を傾け、眠気がゆつくりと温まった体を包んでゆく贅沢を味わうことができた。

所は、北アルプスの最奥、黒部川の源流地帯、赤い屋根の、山小屋にしては小さい「高天原山荘」。標高二千二百メートル、数カ所ある入山口のいずれからも、二日はかかるランプの秘湯として知られている。

温泉は、山荘から片道一キロ(約二十分)、黒部川支流の河原沿いに女性用、混浴、女性露天風呂と三つある。むしろをかけただけの

簡素な白濁硫化水素泉で、心地よい湯温だ。

昨年、NHKの番組で登山家の田部井淳子さんと男性アナウンサーが北アルプスを縦走する番組が放映された。映し出された、なだらかなお皿を裏返したような盛り上がり、「雲の平」。北アルプスの最も奥に位置する平原は標高二千五百メートル、四方を赤牛岳、薬師岳、黒部五郎岳、水晶岳等の三千メートル級の高山に囲まれ、お花畑と池塘、岩と針葉樹が織りなす雲上の楽園なのだ。「日本庭園」「スイス庭園」「アラスカ庭園」「ギリシヤ庭園」等、景観ごとに名前がついている。

番組を見て今年訪ねる登山者が増えたというが、私も以前から奥黒部の一帯には興味を持っていて、機会を待っていた。ちょうど娘に一週間合宿があると聞き、

このチャンスに長年の夢だった「雲の平・高天原温泉行き」を決行することにした。周囲から「まさか一人で?」と声がかかる。「もちろん単独行!」

エベレスト単独無酸素登頂を目指す栗木史多氏を挙げるまでもなく、一人で山を目指すのは、自己や孤独との戦いである。同行者の遅いペースにいら立つこともなく、速い場合は遅れま

いと必死について行くのも苦痛だ。マイペースで登るためには、事前の周到な準備と日頃の体力や技術トレーニング、そして緊急時の判断の素早さが人一倍重要になる。ガイドや他人まかせにして遭難事故に至った例もあるし、いずれにしても自己責任の世界だ。

梱包の仕方、はしごや鎖場の降り方、学生時代、山岳部で鍛えられた経験をよ

みがえらせながら、緊急時の食糧いざという時のザイルまで用意して旅立った。

第一日目：長岡発北陸道を富山県立山インターで下車。立山町を経て、有峰林道小口川線を標高千三百メートルの折立へ。林道は有料で、夜間は通行止めになる。折立の駐車場は既に百台以上の車で溢れていたが、何とか駐車。車中泊。

第二日目：折立発。いよいよ登山開始である。根が張る樹林帯の急登が続く。雲行きが怪しくなってくる頃、森林限界になり、木道や階段のだから登りとなる。アルプス最奥の山々、高山湾が顔を見せるはずだが、ガスと雨足が強くなる。五・六キロ、五時間後、太郎平小屋着。風雨強くなる中を薬師沢小屋へと向かう。沢は増水し、渡渉で登山靴は水浸し。約三キロ、二時間半後小

屋着。薬師沢小屋は黒部川と薬師沢の出会いにあり、増水のため雲の平山荘まで行く予定を諦める。



三日目：小屋を出て、沢の大石ゴロゴロの急な登りに取りつく。突然平らな木道になると、雲の平山荘は近い。三時間半を要し、あこがれの雲の平に来てみれば、風雨強く、ガスで視界ゼロ。高天原山荘へと向かう。二時間半後陽が射ってきてお花畑や池塘のある草原、静かな高天原へ到着。河原のお風呂の往復はしんどいが、誰もいない湯

船で奥黒部の秘湯に浸る充実感に疲れも吹き飛んだ。

四日目：往路を太郎平小屋へと戻ってゆく。六時間後、小屋着。雨になる。

五日目：素晴らしい晴天。アルプスの峰々の間から上る朝日を見る。薬師岳を往復六時間。立山、剣岳、槍、穂高：ああ、日本アルプスが指呼のうちに見える。「アルプス一万尺、薬師の上でアルペン踊りを踊りましょ」山頂でご機嫌な鼻歌。この日九時間歩き、駐車場にフィニッシュした。

ボブの独り言



みんなと一緒に赤ちゃんの成長を見守ります

ボブの独り言

今年の夏は言葉にならないほど暑い日々が続いています。庭の木々もこの暑さに悲鳴をあげているようにみえますが、夜は虫の鳴き声が賑やかになってきました。今年の夏は本当に暑かったね！という日ももうすぐでしょう。

先代のペコはクーラーが

嫌いだったようですが、私はこんなに暑いと夜中の涼しい時は外に出て、日中はクーラーの部屋で休んでいます。

お盆も十日位過ぎた頃、何やら家の中が私がかつて経験したことのない雰囲気になっていました。そして何処を探しても久美



第五十二号、新年号は平成二十三年二月一日(土)発刊予定です

さんの姿が見当たらず、夜になっても帰って来ないではありませんか？ 私の辛いところにまで手がとどく久美さんがいないのは本当に困っていたのですが、待ちに待った赤ちゃんの誕生でした。お盆の忙しい最中の予定日だったのが十日余も過ぎて、お寺の一番静かな頃に。今までのように私の方向に向けられていた目が随分と減るとは思いますが、私も心から「おめでとー」です！何時も私を抱いていた久美さんは、初めて赤ちゃんを抱いた時「私よりずっと軽い！」と思ったそうです。私も少しダイエットをしなければならぬのですが、この前も餌の袋を目の前にして二袋も食いちぎって食べてしまいました。

八月最後の日曜日、富山まで出張で来ていた大阪に

住んでいる二番目のお兄ちゃん、新潟に住んでいるお姉ちゃん夫婦も甥っ子の誕生を祝って駆けつけてくれ、久々に何時までも賑やかな笑い声が聞こえていました。

普段食事をしている部屋には、犬のサクラとノンがいるので私は怖くて部屋にも入っていけないのですが、赤ちゃんが帰って来てから住職家族は朝・昼は今迄どおり下の部屋で食事をし、夕食は皆、晩酌をするものですから、赤ちゃんの寝顔を見ながらみんなで二階でとる事になりました。私にとつて今まで淋しい日々を過ごしていただけに、こんな日が来るなんてまるで夢見心地です。私もみんなと一緒に成長を見守りたいと思います。ニヤーン。

編集 雑感

今年六月に探査衛星「はやぶさ」が七年の歳月をかけた三億キロ彼方最長でも五四〇メートルの小さな星「いとかわ」までの飛行を終え地球に戻ってきました。かつて鳥人間コンテストでの完全往復飛行を目の当たりにしたときは、果たして戻つてこれるのかハラハラ・ドキドキ・ワクワクの一時間でしたが、「はやぶさ」も地球誕生に繋がる情報を持ち帰ってくるのかハラハラ・ドキドキ・ワクワクの毎日で感動ものでした。途中、何度も宇宙の藻屑になりそうな危機を乗り越えての帰還という事で、日本の技術を誇りに思います。

見上げれば満点の星と天の川が横たわり光り輝いていました。宇宙の一番先はどうなっているんだろう、宇宙人はいるんだろうかと想像を膨らませたものです。宇宙には天の川と同じ銀河系が一〇〇〇億個あり、銀河系には一〇〇〇億個の星があるんだそうです。掛け算をすると一の後ろに〇が二個にもなる、一垓(がい)という想像もつかない数字です。その中に我々が生きている星地球があります。この地球には六八億人の人間が生きており、その一人が私であり、あなたです。宇宙からみれば一人の人間は米粒のようなものですが、今日もこの地球に立派に生を受け誕生し、宇宙の一員としての大きな営みを続けています。

安善寺、近藤家にもこの八月二五日新たな命が授けられました。男子だそうですね。おめでとーございます。檀家一同より心からのお祝いを申し上げます。

高橋 潔

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。